

「進路に関わる困難さを抱える生徒」に対する支援  
の実践：「個別進路支援計画」の作成を通して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 真野, 沙月 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00007727">https://doi.org/10.14945/00007727</a>

# 「進路に関わる困難さを抱える生徒」に対する支援の実践

—「個別進路支援計画」の作成を通して—

真野 沙月

Supporting Students with Career Path Difficulties:

The Development of an Individual Guidance Support System

Satsuki MANO

## 1. 問題の所在と課題

「夢なんてない」「社会にでるのは不安だ」「おとなになりたくない」、教育実習や学習支援ボランティアで出会った子どもたちの多くが、社会や大人への不信感を抱き、また自己理解の乏しさから、将来への夢や希望を抱くことができずにもがき苦しんでいる現状を目の当たりにしてきた。このような現状は、なにも私自身の周りだけで起きているのではない。世界規模で実施される TIMSS 調査や PISA 調査によれば、我が国の子どもたちは、他国に比べ、将来就きたい仕事や自分の将来のために学習しようとする意識が低いということが明らかになっている。

未来社会を担っていく我が国の子どもたちの多くが、社会へ出ることを前向きに受け入れられない現状がある。もちろん、変化の激しい現代社会にあっては、誰しもが社会や未来に対して不安を感じたり、明確な展望を持ちにくい状況に置かれている。しかしながら、社会や自身の将来像に対する不安というよりも、それ以前に「社会自体を正面から見ようとしない」、「自分を顧みようとしない」、「自分さえよければいい」、「ひとりで生きていくから他人なんて関係ない」というように、自分の殻に閉じこもったり、狭い視野からしか物事を考えることしかできない若者が多く見受けられるように思われる。

このような実態の背景として、1. 非正規雇用やリストラの増加、就職難など、先行き不透明な経済基盤・社会の認識だけが子どもたちに先行してしまった結果、働くことを肯定的に捉えられず、社会に出ることへの不安や不満を日常的に抱え込んでしまったのではないか。2. 核家族化の進展と地域コミュニティの衰退の影響で、「地域教育力」が低下した結果、子どもと社会とを繋ぐ地域との関わり合いが薄れたことで、子どもたちは「社会」や身近な大人と触れ合う機会を失い、このことが、社会や大人への不信感を招くきっかけの一翼となったのではないだろうか。3. 産業構造の質的变化、核家族化、地域コミュニティの低下など、子どもたちを取り巻く現代社会が複雑化・多様化したにもかかわらず、時代の要請と子どもたちの実態や個性を十分に考慮した進路指導が行われていない現状があるのではないだろうか。進路は子どもたちそれぞれゴールも違えば道のりも違う。もちろん、進路に関わる悩みや困難さの程度も誰一人同じということはないだろう。進路指導こそ、一人ひとりの個性や実態に応じたいいねいな指導・支援が必要なのではないだろうか？ 上述した子どもたちの現状を打開し、子どもたちが将来の夢や希望を抱き、自分に「自信」をもって、安心して社会参画することができる基盤を、学校教育段階で重点的に育成することが、これからの新しい時代を切り拓いていく子どもたちに必要な教育であると考え。この教育の大きな足がかりとなるのが、「進路指導」であり、特に社会と一番近い位置にある高等学校教育段階において、「個に寄り添った丁寧な進路指導」を展開し、一人でも多くの子どもたちが、①将来の自己像を想像することができる、②進路実現のために、自分は「今」なにができるのか？何をすべきか？を考え、行動することができる、③自分に自信をもち、主体的な進路選択を行うことができる、④社会への関心を深め、社会参画す

る意欲をもつことができる等、進路やキャリアを前向きに考え、主体的な進路選択を可能にする様々な知識・技能を身につけさせる必要があるだろう。このような考えに至り、「個に寄り添った丁寧な進路指導」を追究していこうと考えた。

## 2. 研究の目的

「個に寄り添った丁寧な進路指導」を考える上で、本研究で特に取り上げたい対象は、進路に関わる悩みをもち、困難さを抱えている生徒である。このような生徒一人ひとりの進路に関わる困難さを可視化し、効果的な指導・支援方法を導きだし、教員の共通理解・指導方針のもと、個に寄り添った丁寧な進路指導を行うことは有意義であろう。具体的には

1. 高校生の進路に関わる困難さの内容や特徴を把握するための実態調査を実施し、その結果に基づいて支援対象とする生徒を抽出する手がかりを得る。
2. 進路に関わる困難さを抱えた支援対象生徒を数名抽出し、彼らの「個別進路支援計画」を作成する。計画書では、支援対象生徒の抱える困難さ（進路、学校生活、学力等）を可視化し、これらの困難さに教員チームで対応できるような計画書の作成を目指す。またこの計画書のフォーマットは、様々な進路の困難さに対応できるような、汎用性の高い計画書の作成を目指すこととする。
3. 作成された「個別進路支援計画」に基づいて、実習校の関係職員と連携して個に応じた支援活動を実践し、その成果を明らかにする。

このような目的を柱に、2013年4月から2014年3月までの約1年間、研究実習校のS高等学校1年部に所属し、3つのアクションリサーチを実施し、その成果を明らかにする。

## 3. 【 アクションリサーチ1 】実態把握

### (1) 目的

実習校の生徒の進路到達度の構造を明らかにするとともに、適切な測定尺度の開発を行う。また、進路到達度に影響を与えると考えられる要因を明らかにする。さらに、質問紙に対する回答結果に基づいて、進路に関わる困難さを抱えている支援対象生徒を抽出するための手がかりを得る。

### (2) 方法

調査対象と実施日：S高等学校に在籍する1学年生徒200名。2013年4月26日第6校時。

調査内容：進路到達度と生活実態に関する質問紙調査。

本調査の質問項目及び尺度を検討するため、進路学習の達成度評価に関する研究（本間・井筒・大坪・眞如・富岡2003）、学校適応-脱学校尺度（久世・二宮・大野1985）、青年の学校への適応感とその規定要因（大久保2005）、自尊感情や自己肯定感に関する研究（東京都教職員研修センター紀要）の質問項目及び尺度を参考に、実習校の先生方との相談を交えながら質問紙を作成し、実施した。質問紙は、4件法（あてはまる、どちらかというにあてはまる、どちらかというにあてはまらない、あてはまらない）で回答を求めた。

### (3) 結果

進路到達度に関する尺度13項目と生活実態に関する尺度16項目に対して因子分析（主因子法、Promax回転）を行った。妥当性・信頼性を検討した結果、進路到達度に関する質問項目1と2を除くことが妥当と判断し、進路到達度の項目3から13項目で再度因子分析を行った。結果、進路到達度を表す因子とし

て、Ⅰ「将来設計能力」Ⅱ「進路情報活用能力」の2因子と、生活実態を表す因子として、Ⅰ「学校適応感」Ⅱ「自立心」Ⅲ「自己肯定感」Ⅳ「社会適応感」Ⅴ「自己承認欲求」の5因子を抽出した。

進路到達度の第Ⅰ因子は、生徒が将来の自己像や成し遂げたいことなどを進路と結びつけ、進路実現に向けて目標をたて、行動することができるか？など、将来設計との関連があると考え、「将来設計能力」と名づけた。第Ⅱ因子は、進路に関する情報を積極的に探索することができるか？現状どのような方法で進路情報を得ているのか？等、情報活用との関連があると考え、「進路情報活用能力」と名づけた。この2つの因子得点が高ければ高いほど、進路到達度が高いという結果となった (table2)。

生活実態の第Ⅰ因子は、学校やクラスの居心地や学校における友人関係に起因する因子で構成されていることから、「学校適応感」と名づけた。第Ⅱ因子は、勤労観・職業観に加え、社会へでることを肯定的に捉えているなど、自立に起因する因子で構成されていることから、「自立心」と名づけた。第Ⅲ因子は、自分の存在を認め、肯定し価値付けする因子で構成されていることから、「自己肯定感」と名づけた。第Ⅳ因子は、社会に対するイメージや自分が社会から必要とされているかなど、社会に対する肯定的な考えや価値に起因する因子で構成されていることから、「社会肯定感」と名づけた。第Ⅴ因子は、自分が他者からどのようにみられているのか？必要とされているか？などの自己承認に起因する因子で構成されていることから、「自己承認欲求」と名づけた (table2)。

進路到達度尺度と生活実態尺度の依存的妥当性を検討するため、進路到達度因子Ⅰ「将来設計能力」Ⅱ「進路情報活用能力」と生活実態因子Ⅰ「学校適応感」Ⅱ「自立心」Ⅲ「自己肯定感」Ⅳ「社会適応感」Ⅴ「自己承認欲求」の相関係数を算出した (Table1)。その結果、全体的に正の相関がみられた。特筆して、進路到達度因子Ⅰ「将来設計能力」とⅡ「進路情報活用能力」尺度との間に有意な正の相関が認められた。また、生活実態因子Ⅲ「自己肯定感」とⅤ「自己承認欲求」との間にも有意な正の相関が認められた。注目したいのが、進路到達度因子Ⅰ「将来設計能力」と生活実態因子Ⅲ「自己肯定感」尺度との間には相関が見られなかった点である。

進路到達度因子Ⅰ「将来設計能力」とⅡ「進路情報活用能力」との間の有意な正の相関に関しては、「将来設計能力」が高ければ、将来のことに目を向け、自分の進路に関しての様々な情報をしらべようとすることが想定されることから、この2つの因子は相関が高いと言えるだろう。

生活実態因子Ⅲ「自己肯定感」とⅤ「自己承認欲求」との間の有意な正の相関に関しては、自己と向き合い、自己を肯定的に捉えることで、他者に自分を認めてもらいたい、自分のことを必要としてもらいたい、頼りにしてもらいたいなどの「自己承認欲求」が芽生えることが想定されることから、この2つの因子に関しても相関が高いと言えるだろう。

唯一、相関関係が認められなかった進路到達度因子Ⅰ「将来設計能力」と生活実態因子Ⅲ「自己肯定感」に関しては、「今現在の自己」を肯定的に捉えることと、「将来の自己像」とを考えることは、一見相関がみられる結果となるのではないかと想定していたのだが、相関はみられなかった。「自己肯定感」が高いということは、現在の自己を認め満足している傾向にあるということが言え、言い換えるのであれば現状維持を望んでいる可能性がある。そのため、現在の自己にしか目を向けられないような状態になっているのではないだろうか。このような傾向にある場合、将来設計を考えることを促す手立てや支援を意図的に行っていく必要があるだろう。「自己肯定感」が高いからといって、「将来設計能力」も高いだろうという安易な想定は間違っていたことが、この結果からわかり、さらに、S高等学校1年生の特徴的な傾向を把握することができた。

Table 1 進路到達因子と生活実態因子の相関係数

	進路到達因子 I 将来設計能力	進路到達因子 II 進路情報活用能力	生活実態因子 I 学校適応	生活実態因子 II 自立	生活実態因子 III 社会適応	生活実態因子 IV 自己満足	生活実態因子 V 自己満足
進路到達因子 I 将来設計能力 Pearson の相関係数 (双方向)	1	.714**	.009	-.006	-.020	-.004	-.037
N	190	190	190	190	190	190	190
進路到達因子 II 進路情報活用能力 Pearson の相関係数 (双方向)	.714**	1	.211**	-.072*	-.075**	-.081**	-.081**
N	190	190	190	190	190	190	190
生活実態因子 I 学校適応 Pearson の相関係数 (双方向)	.009	.211**	1	-.004	-.004	-.004	-.004
N	190	190	190	190	190	190	190
生活実態因子 II 自立 Pearson の相関係数 (双方向)	-.006	-.072*	-.004	1	-.004	-.004	-.004
N	190	190	190	190	190	190	190
生活実態因子 III 社会適応 Pearson の相関係数 (双方向)	-.020	-.075**	-.004	-.004	1	-.004	-.004
N	190	190	190	190	190	190	190
生活実態因子 IV 自己満足 Pearson の相関係数 (双方向)	-.004	-.081**	-.004	-.004	-.004	1	-.004
N	190	190	190	190	190	190	190
生活実態因子 V 自己満足 Pearson の相関係数 (双方向)	-.037	-.081**	-.004	-.004	-.004	-.004	1
N	190	190	190	190	190	190	190

Table 2 進路到達度と生活実態の因子構造

項目	因子					固有値	説明率	因子抽出
	I	II	III	IV	V			
到達17 人が就職先を見て(希望なし、希望あり)の差をどれだけ感じましたか。	.011	-0.05	0.06	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
到達18 自分の将来の生活(収入、支出)により、こんな生活したい(感)に近づいて見えたことがありますか。	.047	0.14	0.03	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
到達19 将来の夢や希望、やっていたことがありますか。	.047	0.14	0.03	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
到達20 高校生活のように通って、後悔や課題はありますか。	.047	0.14	0.03	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
到達21 将来の夢や希望を達成するための進路を選んで見えていますか。	.047	0.14	0.03	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
到達22 自分の将来の生活(収入、支出)により、こんな生活したい(感)に近づいて見えたことがありますか。	.047	0.14	0.03	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
到達23 高校生活での夢や希望、具体的に決まっていますか。	.047	0.14	0.03	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
到達24 進路に関する情報、インターネットで調べたことがありますか。	.047	0.14	0.03	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
到達25 進路に関する情報や先輩や学校の先生から聞いたことがありますか。	.047	0.14	0.03	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
到達26 進路を実現するために必要な方法(大学)は、専門学校に行き、学校の情報、資料や先生などに問い合わせたことがありますか。	.047	0.14	0.03	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
到達27 将来の夢や希望、やっていたことがありますか。	.047	0.14	0.03	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

#### 4. 【アクションリサーチ2】支援対象生徒の抽出と「個別進路支援計画」の作成

(1) 目的：アクションリサーチ I の結果（質問紙調査結果及び関係職員の話）をもとに

1. 進路に関わる困難さを抱えている支援対象生徒を抽出する
2. 支援対象生徒の進路に関わる困難さを可視化し、その生徒に応じた支援・指導を行うための「個別進路支援計画」の作成

#### (2) 方法

- ① 因子分析の結果からデータ上の支援対象生徒候補を抽出する。
- ② 担任の先生の見解と話し合いをもとに、支援対象生徒候補の中から、実際に進路に関わる困難さを抱えている支援対象生徒を決定する
- ③ 支援対象生徒の情報収集と分析
- ④ 担任の先生と協働して「個別進路支援計画」を作成する

#### (3) 結果

##### ○支援対象生徒候補の決定

進路到達度の2因子「将来設計能力」と「進路情報活用能力」の特徴を生徒個人がどれだけもっているか？を分析し、因子得点の高い順に順位付けを行った。さらに、2因子のどちらかの因子得点が-1.5以下の著しく進路到達度の低い生徒を19名抽出し、データ上の対象生徒候補に決定した。

##### ○支援対象生徒の抽出と「進路に関わる困難さ」のタイプ分け

19名の対象生徒候補は、あくまでデータ上で進路到達度が低いという結果になっただけであり、実際に彼らが進路に関わる困難さを抱えているかどうかは判断しきれない節がある。そのため支援対象生徒を決定する上で、いくつかの抽出基準を設けた。

##### 支援対象生徒抽出基準

- ・ 進路到達因子 I 「将来設計能力」 II 「進路情報活用能力」 の2つの因子が著しく低い
- ・ 対象生徒候補自身が、「進路」について困り感を抱えている
- ・ 担任の先生（または関係職員）が、対象生徒候補の「進路」に関わることで、心配しているまたは指導や支援を行う上で困難さを抱えており、何かしら彼らに働きかけをしたいという想いや切実感を抱いている
- ・ 過度な生徒指導上の問題を抱えていない

このような基準をもとに、対象生徒候補のことをよく理解している担任の先生にインタビューを行い、データとの擦り合わせを行って再度分析し、進路に関わる困難さを抱えている支援対象生徒4名（A・B・C・D）を抽出した。さらに、担任の先生の見解、筆者の行動観察記録、1学期分の「産業社会と人間」のポートフォリオを参考に、進路に関わる困難さのタイプ別に4人を分類した（Fig. 1）。

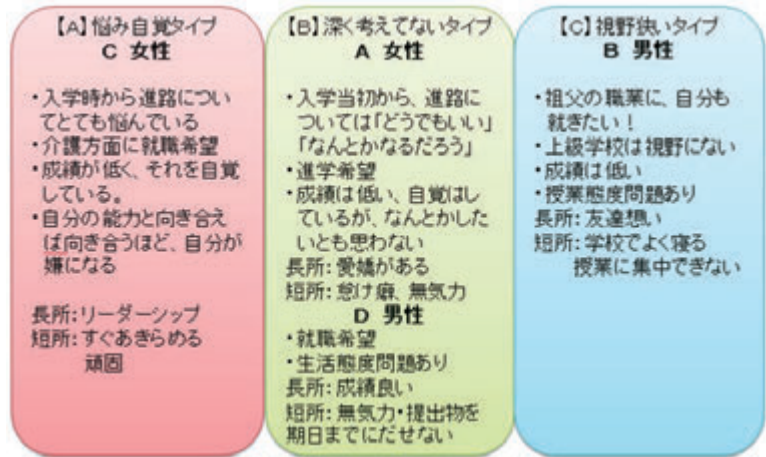


Fig. 1 進路に関わる困難さのタイプ別分類と対象生徒の概要

### ○支援対象生徒の情報収集

支援対象生徒4名の「個別進路支援計画」を作成するにあたり、以下の情報収集を行った。

- ①支援対象生徒の行動観察（エピソード記録）
- ②支援対象生徒の関係職員に対するインタビュー
- ③支援対象生徒の授業ポートフォリオ分析

### ○支援対象生徒4名の「個別進路支援計画」の作成

「個別進路支援計画」を作成するにあたり、主に特別支援教育の「個別指導（支援）計画」を参考にフォーマットを作成した。特別支援教育では、児童生徒一人ひとりの個性・特徴・ニーズに応じた「個に特化した指導」に精通していること、児童生徒別の「個別指導（支援）計画」を作成し、教員がチームで対応されていることなど、本研究の主旨と合致する点がいくつか挙げられたため、特別支援教育の考え方及び「個別指導（支援）計画」を参考とした。さらに信憑性の高い計画書の作成を目指し、オリジナル要素として支援対象生徒に関わる「関係職員インタビュー」の情報を抜粋し、計画書に反映した。支援対象生徒に関わる多くの先生方の視点を取り入れることで、支援対象生徒の個性や特徴が明らかになることはもちろん、効果的な支援方略の糸口として機能することが期待される。

収集した支援対象生徒の情報を参考に、担任の先生と協働して「個別進路支援計画」を作成した。以下支援対象生徒の一人「D」の「個別進路支援計画」を記載する（Fig2）。



## 5. 【 アクションリサーチ3 】 支援対象生徒「D」に対する支援の実践

### (1) 目的

Dの「個別進路支援計画」の全体目標①「提出物を期日までにだせるようにする」全体目標③「自己管理能力の向上」を達成するための第一歩として、スケジュール管理及び目標を立て実行し、振り返ることを習慣化させるために行う。

### (2) 方法

「自己管理能力向上シート」を作成し、約1週間取り組ませる。①朝のHR前の時間に先生と共に予定と目標までの内容をチェックする。②放課後、先生と共に提出物チェックと目標達成度についてチェックする。③次の日のワークシートを、家で書いて来させる→①へ

※朝と帰りにそれぞれ担任の先生（または筆者）がDと一緒にワークシートに沿って振り返る時間をとる。



Fig2. Dの個別進路支援計画（計3枚）

### (3) 結果

Dの変容を見取るため、事前及び事後アンケートと二者面談（Dと筆者）を実施した。

- ・「提出物を忘れずに提出することができた」と自己評価している
- ・ワークシートを見ながら、次の日の予定を立てることがあり、スケジュール管理に役だった
- ・これからも引き続きワークシートをはじめ、様々なことにチャレンジしようと思っている

等、約1週間の短い期間の支援ではあったが、Dの進路に関わる困難さの根底にあると思われる生活習慣の見直し及び「提出物を期日までにだす」ことに対する困難さの軽減の第一歩を踏み出すことができたようだ。

## 6. 成果と今後の課題

### ○アクションリサーチの成果

- ・進路に関わる実態や生活実態に関わる様々な傾向を詳細な因子分析データによって明らかにしたことで、本研究の主旨である「進路に関わる困難さを抱えた生徒」を抽出する手がかりとしても大きな意味をもつものとなった。
- ・支援対象生徒4名それぞれの進路に関わる困難さを可視化し、それぞれの困難さを軽減するような目標をたて具体的に、いつ、誰が、どこで（どの場面で）、どのような支援を行っていくのかといった、詳細な「個別進路支援計画」を多角的な視点を参考にして作成することに成功したこと。
- ・「個別進路支援計画」に沿った支援による効果が期待できること（支援を行ったことによるDの変容）

### ○今後の課題

- ・「個別進路支援計画」に沿った支援の継続（D）及び支援の拡大（他の支援対象生徒）と引き継ぎ
- ・「個に応じた丁寧な進路指導」の手がかりとして十分に機能する計画書にするための改良及び啓発活動
- ・子ども目線・視点に立った進路指導の推進  
子どもの気持ち・ニーズ・個性・特性等を十分に考慮した「個に寄りそった丁寧な進路指導」の推進